



# 古壺新酒

第34号

令和3年6月30日

日本伝統俳句協会  
北信越支部長

瀬在光本

題字 安原 葉  
ホトトギス同人会長

## ご挨拶

日本伝統俳句協会北信越支部長 瀬在光本



立山連峰を望む

立山連峰の雪も消え、青葉眩しい時節を迎え會員の皆様におかれましては益々ご清祥の事と存じます。日頃から本会に対しご理解とご協力戴いておりますことに心より感謝申し上げます。

さて、さかのほればこの北信越の会報は1992年(平成4年)に当時の今村青魚支部長の折に「北信越」と標題され第一号が発刊されました。その後諸先輩のご尽力で引き継がれてまいりましたが、令和元年に標題を「古壺新酒」と改名させて頂きました。発刊当時の今村支部長の挨拶文中に「近頃、俳句総合誌が増加してきたが我々は右顧左眊することなく、ホトトギスを主体とした「花鳥諷詠」「客観写生」の伝統俳句の道に徹していくべきだ」と述べておられます。私たち伝統俳句協会員として虚子の提唱された俳句に対する教え又先輩の皆様のご教示を心におきこの先も運営していこうと考えておるところです。

ところで、ここ一年余のコロナ禍で日頃私たちが過してきた日常生活や俳句を楽しむ事などが大きく制限されてきました。

そこで改めて感じることは、こうして何気なく行われてきた日常がいかに大切な事であり意味のある事であったかを思い起こされている方がたくさんおられるかと思えます。

俳句に勤しんでいる者にとって特に感ずるところは次のようなことがあるのではないのでしょうか。句会、吟行の意義

ここ一年開催が大きく制限されている、仲間が集っての吟行や句会すらできず、改めて物足りなさを感じている方が多いのではないのでしょうか。吟行で同じ空、山や草花を見ても仲間の自分と違った見方や、表現の仕方に感心したり感動を覚える事すらあり、そして句会でお互いの句を論評し合い、教え教えられることが楽しく意味のある事であることに気づきこれらの機会が無くなり改めてそれが大切な事だと感じておられる方も多いかと思います。

句づくりは心の薬  
又、この一年何時も気軽にあった句仲間に出えないことに閉塞感を覚えていた時、見たものの感じたものを俳句で表現することが心の解放をもたらし、安らぎになりいわゆる「心の薬」になっていることを改めて感じた方もおられたかと思えます。

古壺新酒の教示のもとに  
ここ暫くはいわゆるウイズ・コロナの中での制限のある生活をしていかなければならないと思われ  
ます。

この一時止まったような日常の中でそれぞれが、自分の俳句を見つめなおし新たな心境を生み出す良い機会にされたらどうでしょう。

その時、虚子の提唱した「古壺新酒」の考え方がつまり「守るべきものは守りそして新しいことにもチャレンジする」との考え方を噛みしめながら新たな心境で俳句作りを楽しみ又新しい仲間づくりに心掛けて戴けたら幸いです。

皆様の一層のご健勝と、またご健吟されますことをご祈念申し上げご挨拶とさせていただきます。



# 俳句会

## 第七十四回(令和二年九月)

### 虚子記念姨捨観月句会

令和二年十月十四日に予定していましたが第七十四回虚子記念姨捨観月句会は、新型コロナウイルスの終息が叶わず、中止となってしまいました。

虚子が小諸に疎開していた昭和二十年終戦の年の仲秋、更級姨捨に念願の観月句会を催しました。地元信州の俳人たちの計らいでした。その後虚子が鎌倉へ帰られてからも、信州の俳人たちによって毎年姨捨観月句会が行なわれてきました。それは、現在に至るまで一回も休むことなく続けられています。

往時は一升を持ち寄り、枝豆、さつまいも、時にはおでん鍋を持ち込んだり、それは楽しいものでした。和田南星、市川虚空、轟蘆火、瀬在苹果、小池星児、などなど先輩方はみな物故者となり、句会の形式も年々変わってゆきました。現在は長楽寺の手打ちそばと色々な田舎料理が楽しみの句会となり、小諸をはじめ各地からの参加もあり、結社「りんどう」の方々のご参加もいただき、仲良く研鑽を積む会となっています。

大久保白村 選

特選 四才の姫のお酌や今日の月 杵淵 晴子

(選評) 姫とはお孫さんだろうか、至福のひとつとき、秀逸 閑かさや姨捨山の今日の月 田中 延子

遺影まで届きし望の月明り 小池 保子

佳作 夕月を揺らす千曲の風止まず 滝澤さくら

名月や灯をひとつ消し齡思ふ 佐藤 恵一  
検温を済ませ月見の会席へ 山口 芳輝

鈴木しどみ 選

特選 姨捨の棚田転がりさうな月 丸山 ま美

(選評) 月の句として類想がないのがよい。まさに山から躍り出た月は転がりそうに棚田の上に。心の高揚が生んだ斬新な句。

秀逸 居酒屋のあるじと二人居待月 大久保白村

縦にして横にして撮る棚田秋 瀬在 光本  
佳作 千の田もいつしか眠る良夜かな 中村 弘

月を待つ心の隅にある思ひ 宮澤 正

爽やかに遊子となりて虚子の径 滝澤さくら  
西本ゆき 選

特選 追憶は美しき虚子門月見句会 小池 保子

(選評) 月見句会の始まった頃からの思い出を美しき虚子門と言いつつ切った事が素晴らしい。

秀逸 千の田に千の風あり稲の秋 尾和有美子

姨岩の語るいにしへ深む秋 永井 幸子  
佳作 月いよよ三方開けて月見堂 鈴木しどみ

野仏のみそなふ棚田豊の秋 田中 延子

ひと色に姨捨染むる稲田かな 中村 弘  
川崎繁子 選

特選 月に酌み句談義せし日遠くなり 小池 保子

(選評) 虚子先生のご健在の頃、姨捨駅の近くの宿で句会をし、お酒を酌みかわして話に花が咲いたと伺った事があり、それを思い出し古き時代が偲ばれた句。

秀逸 観音の扉のすきの月明り 鈴木しどみ

村の名の消える今年の稲を刈る 杵淵 晴子

佳作 更級や月の都といふ縁 瀬在 光本

ひと色に姨捨染むる稲田かな 中村 弘  
列車過ぐ鏡台山に月登る 宮下 茂

小池保子 選

特選 姨岩の語るいにしへ深む秋 永井 幸子

(選評) 捨てられた姨たちの骨から出来たと言うことごととした姨岩にいにしへよりの伝説、寂しく心にしみます。

秀逸 酒好きのお尚に月の酒届く 鈴木しどみ

満月や魁夷の白馬飛び跳ねて 山口 芳輝  
佳作 月天心今宵窓辺に寄り添ひて 西本 ゆき

荷作りにはち切れるほど秋詰めて 大井 悦子

姨岩に登るは難儀草の花 川崎 繁子  
瀬在光本 選

特選 月白やいよいよ心高まりて 川崎 繁子

(選評) 月が山の端から上がるのは待てば待つほど結構遅い時間になる。月がでる予兆の月白となり、今日はどんな月を眺められるかとわくわくした高揚感が素直に読み込まれた。

秀逸 花野ゆくどの草も吾に親しけれ 清水 順子

長月の庭に文殻焚きにけり 大久保白村  
佳作 威し銃棚田の天を打ち抜きぬ 青木く美子

四才の姫のお酌や今日の月 杵淵 晴子

細き身や庶民離れの秋刀魚を乞う 湊 ひろ子  
青木く美子 選

特選 姨捨の棚田転がりさうな月 丸山 ま美

(選評) 今年の名月は、まさに転がりさうな良い月でした。あえて満月と云わず転がりさうな月と表現した所が俳諧味があり良かったです。

月と表現した所が俳諧味があり良かったです。

す。

秀逸 千の田もいつしか眠る良夜かな 中村 弘

検温を済ませ月見の会席へ 山口 芳輝

佳作 酒好きのお尚に月の酒届く 鈴木しどみ

コロナ禍の憂さは花野に放ちけり 小池 保子

ふる里へつづく坂道後の月 杵淵 晴子

一人一句抄 大久保白村

落葉松の秀を流星の走りけり 瀬在 光本

逝きし人みなこの天宇星明り 牧野 菊生

秋暑し以下同文の感謝状 小泉いく子

バス降りてより連れとなり千草かな 勝山 學

軽快にマラソン目指す稲穂径 田中 延子

野仏の見そなふ棚田豊の秋 金子 典子

彼岸花暫し眺める長楽寺 鈴木しどみ

酒好きのお尚に月の酒届く 小池 保子

月に酌み句談義せし日遠くなり 川崎 繁子

姨岩に登るは難儀草の花 佐藤ゆきな

更科の山河恋しき月見かな 藤澤 方恵

鬼灯を鳴らし夕日にまみれけり 脇若 恵子

はぜ掛けや大地見つめる稲穂かな 青木く美子

名月やスイッチバックの電車待つ 尾和有美子

姨捨の再会ならず月の寺 笠井 厚子

赤とんぼ貨物列車のゆつくりと 杵淵 晴子

行きがちがひ列車待つ窓いわし雲 島田 孝子

山里の孤軍奮闘案山子かな 中澤 房子

水澄めり城下の町に糍店 アルプスと記念写真の花杏 中村 恵美子

望月や座る畦草湿りくる 中村 弘

初夏の旅は気ままや小石蹴る 宮崎 一子

月を見る冠着山の子抱岩 若林みき子

列車過ぐ鏡台山に月登る 宮下 茂

長楽寺千年の月語り継ぎ 宮澤 正

唇がまづ飛び出して新酒かな 加藤 公男

月見句会黙と笑顔の長楽寺 宮澤 澄明

二人して低き稲架解く山日和 西本 ゆき

せつけんの泡立つ白さ秋の声 大井 悦子

甘き香をどうぞどうぞと稲の花 金箱 一世

句座になほ置かれてをりし秋扇 古澤 萌

慰みに月仰ぐただ仰ぐかな 松本れい子

虫時雨湯宿の闇の深さかな 滝澤さくら

雲間より輝き出する居待月 青木 倫子

広々と青空のときのこ汁 湊 ひろ子

コンビニのおでんを買って良夜かな 佐藤 恵一

姨捨の田切りの水や秋奏づ 岡山 幸子

落水競ふ天上棚田かな 井出 節子

丸顔は運の良き人菊日和 丸山 ま美

虹の脚稲穂にかかる所まで 廣瀬 元

もう稲架をかけたらどうと秋の風 中澤 亥三

満月や魁夷の白馬飛び跳ねて 山口 芳輝

紫苑咲く虚子の言霊おりてきし 吉田 洋子

竜胆の野に埋もれざる濃紫 清水 順子

角ぴんと桔梗のつぼみ膨らめり 清水 節子

方丈へ風縦横の月見堂 小林つくし

秋天の一笔の雲流れゆく 中山 弘美

姨岩の語るいにしへ深む秋 永井 幸子

オンライン閉じて仰ぐや罌雲 小林伊代子

### 石川県部会研修句会

石川県部会は、七月三日あらうみ会と共催で、白山市の明達寺等を吟行し、千代女の里俳句館で研修句会を開催、四十五人が参加しました。

明達寺には子規の画「さくらんぼ」や多くの虚子直筆の句等が展示されており、境内にはホトトギス六百号記念大会で詠んだ

秋晴や盲ひたれども明らかに 虚子

の句碑があります。また、法隆寺の夢殿を模した八角形の蠟扇堂を特別に開帳して貰いました。午前中は伊東弥太郎部会長の講演「虚子と非無」を聞きました。

午後の句会の一人一句抄は次のとおりです。

泰然と泰山木の咲く古刹 村上 秀吾

木戸押しして千代尼の塚や走り萩 出島 達子

久々に茅の輪くぐりて母思ふ 清水 志郷

朝顔の苗鉢並ぶ俳句館 辰巳 昌彦

案内に徹する寺領汗涼し 辰巳 葉流

水無月の杜瑞瑞し明達寺 伊東弥太郎

朝顔の双葉育てよ雨の糸 松田 勲

虚子非無の句碑を讀ふや大夏木 正藤 宗郎

虚子句碑を巡る寺領の涼しけれ 松浦 彰

蠟扇堂涼しく在す師弟像 松本 洋美

梅雨空に真白き駅や千代の里 高見三千子

千代尼堂固く閉ざされ梅雨湿り 木幡 嘉子

蠟扇堂包む大樹の緑濃し 駒形 隼男

雨はれて青葉の街になりけり 森田 康夫

音もなく梅雨喋しづむ千代尼塚 蔵 堯子

夏秋の零るる風の千代尼塚 村本寿美枝



## 福井県部会

涼しさを広げて寺の大櫓  
青田風届く鐘楼非無の寺  
露涼し虚子に縁の明達寺  
万緑やことに城址の大櫓  
虚子と非無偲ぶ法堂露涼し  
万緑のそここに句碑明達寺  
花樗零るる寺や虚子の句碑  
母恋の歌碑へ郭公鳴き募る  
吟行に五感全開梅雨晴間  
洗はれて色新しく濃紫陽花  
紫陽花を対に供へて苔の墓  
一水に堂宇涼しき非無の寺  
千代尼塚夏萩揺らす風止まず  
五六個の梅の実供ふ千代尼塚  
用水の走る境内緑濃し  
朝鮮の灯籠八基下閣に  
みな覗きつられて覗くあめんぼう  
晴れあても風の重たき梅雨の昼  
目の慣れて虚子の句碑読む木下閣  
黴の香もなく明達寺清められ  
境内の毬は急がず七変化  
千代尼堂涼しき風と覗きけり  
夏萩に碑文字なぞるや草風庵  
梅雨茸や足元気にし歩きたる  
新幹線伸びる青田や千代の里  
朝顔を育て千代尼を称ふ館  
茂り合ふ自然のままの虚子の句碑  
どつしりとD51蜘蛛の囀も寄せず  
露涼し石碑になぞる母の歌

水橋眞智子  
西 登美枝  
赤島磨智子  
野村 玲子  
大橋美代子  
中村 礼子  
中村 直美  
中川外代子  
設楽 玲子  
川上 明子  
石田 裕子  
藤田 暁夫  
矢木 桂子  
八百 恵子  
東 幸子  
西田さい雪  
堀田 紀子  
仲谷美枝子  
小島 藍女  
折橋紀世美  
牧野 妙子  
上出 洵  
北七喜美子  
平井 英子  
宮本 青鴻  
北 重子  
北岸 雅通  
鈴木 恵子  
暁鳥 和代

令和二年度日本伝統俳句協会福井県部会に於ける  
事業は次の通りであった。

### ●総会

令和二年五月三十日開催予定の県部会総会は新型コロナウイルス感染症防止のため中止とし令和元年度事業報告、決算報告、決算報告、会計監査を書面をもって決裁させて頂く事とし、次の諸氏の役員留任を頂いた。  
総会終了後の小句会は当季雑詠七句の投句を頂き投句者全員の互選を頂く事とし、その結果は次の通りであった。

田植して海へ繋がる棚田かな 山口 霞牛  
一本の届く筈なき草矢手に 村上 雪  
夏の夜や月下香開花四時間 山岸世詩明  
燐焼くいわし屋と云ふ老舗の名 奥 清女  
夕蛙日記にするす師の訃報 山口やすか  
梅雨晴や県境越へて疫見舞 岸本 幸子  
江戸の粹京の雅や花菖蒲 為永香月枝  
藤棚をくぐれば昨夜の雨雫 中山 昭子  
畑仕事噴出づ汗に滲む汗 多田すみ枝  
迂闊にも蜘蛛の囀に顔かかりたる 伊藤英美子  
母のなき子にも母の日赤い花 高畑 和子  
夏足袋の小はぜのつははず履く 末政千代子  
道元を知る老杉の木下閣 田野井かつを

### ●県部会親睦吟行俳句大会

令和二年十月開催予定の県部会吟行俳句大会は、コロナ禍防止のため中止となり、当季雑詠七句の投句を頂き投句者全員の互選を頂く事とし、その結果は次の通りであった。

三姉妹一人欠けたる生身魂 山口 霞牛  
夜の秋いまだ見えぬ人に文 村上 雪  
夫にもう隠しごとなく梨を剥く 山岸世詩明  
古茶濃ゆくいれて羊羹あつく切る 奥 清女  
朝倉の古井戸覗く秋の聲 四本木ただし  
孫よりの手造りケーキ敬老日 山口やすか  
乗り違ひ帰途は稲田をめづるのみ 岸本 幸子  
道祖神どれも童顔草の花 為永香月枝  
秋霖に鍵の濡れたる芭蕉堂 中山 昭子  
景岳の二十五才をしのぶ秋 高畑 和子  
ふんぎりのつきて一日爽やかに 伊藤英美子  
彼岸花地中に暦ある如し 多田すみ枝  
県境の峠越えれば西虚子忌 末政千代子  
絶え間なく秋を深めてゆく瀬音 田野井かつを

## 富山県部会活動状況

日本伝統俳句協会北信越支部Web会報の更新  
11月より富山県俳句連盟オンラインZOOM俳句会を開始

富山県部会員2名と賛助会員54名が参加  
12月1日 富山県俳句連盟会報に「虚子」に学ぶ日本伝統俳句協会・北信越支部Web会報のQRコード及び紹介記事を掲載  
1月24日 「虚子に学ぶ伝統のホトトギス俳句会」として勉強俳句会  
・近代俳人系譜よりホトトギス派の系譜の位置づけを学習

## 新潟県部会活動報告

各地区結社において句会を実施。全体句会は中止  
日本伝統俳句協会新規加入者の推進

日本伝統俳句協会北信越支部

令和二年思い出の一句

新潟

思ふ日の皆が仰ぎぬ冬の星 小川 則子  
 万代橋渡る秋風虚子句碑へ 大矢あきこ  
 母遺す数千の句や星涼し 関口 智実  
 山裾の春田を分かつ単線路 藤原 哲  
 眼裏に粽結ふ母祖母もあし 佐藤 文子  
 別れ来て又振り返る冬木立 富井千鶴子  
 野の花の供華も涼しき齒塚かな 小川のおこ  
 何事も無きことありがたく涼し 安原 葉  
 夕立や子牛は母へ潜り込み 安井 里子  
 膝まづく時の土の香野紺菊 笠原佐千子  
 ふらここや空を蹴り上げては戻る 桑原 幸子  
 うねりつつ裏返りつつ稲雀 内藤 孝  
 天に鳶地に耕人の鍬光る 桑原たかよし  
 楽しみの一つ夜長の針仕事 板垣 柳子  
 朝の風夕風夜風里涼し 藤井 敏子  
 空に浮く綿雲白し秋惜しむ 飯島 俊子  
 さつぱりとあたま刈つては杜氏来る 田代 草猫  
 富山  
 いつの間に猫も縁側春温し 井上 大輔  
 連綿と続く営み稲の花 有川 寛  
 天領へ鳴き交しあう鵠渡る 平野 孝純

石川

余所行きの母の形見の扇子かな 岩城 未知  
 年かさを忘れまどゐの雛あられ 高城 玲子  
 初蝶やダム放水の轟て 田上真知子  
 御代三代歩み米寿の屠蘇を酌む 寺島皎(故)  
 扇状地一扇として青田風 藤田 百生  
 草の葉の一つとなりぬ秋の蝶 坂本 雪峰  
 一本を煮物風呂吹酔和へにと 北川 秀子  
 歩く腕振れば若やく風五月 稲田 節子  
 瀧を見に登る坂道妣の里 坂井一二三  
 リモートのウイーンフィル年新た 畑中 節子  
 雪原の靄のあふれて道かくす 宇波可津志  
 銀髪に映えて春著は濃紫 荒木 陽子  
 管理地と書かれすすきの意のままに 荒木かづを  
 歌うたひたくなるバラのよく咲いて 片桐 久恵  
 世直しの声一斉に夕蛙 佐野 皐月  
 本に飽きテレビにも飽き日の永し 北川 越草  
 虚子非無の世を近づけて燭涼し 大橋美代子  
 薫風や花嫁のれん掛けて待つ 谷口由美子  
 庭下駄を揃へ待ちある薄紅葉 浅井 和子  
 浦々の殊に鄙びて銀河濃し 宮下 末子  
 庖丁の難儀の果ての南瓜美味 中田 康子  
 金沢は土塀美し夏衣 吉田みはる  
 また会ふ日あるや砂丘の鳥曇 中村 曜子  
 春の星見つむ眼の潤むまで 鈴木 恵子  
 梅雨ごもり仔犬遊ばせ遊ばれて 中川外代子  
 空蟬や露地に忘れし竹箒 松下 薫

富士碧し芒の原の眺望に 八百 恵子  
 星月夜拍子木空に響かせて 川口 俊子  
 野菜庫の中で目覚めし葱坊主 瀬古 祥子  
 穂孕みの青田たつぷり水吞まず 荒谷みえ子  
 ハイタツチできぬ歓喜の汗拭ふ 金子 慶一  
 曲水の煌きにあり梅白し 小幡 道子  
 若き日のアルバム登山夫婦して 澤野 和子  
 孤灯籠まなかひにして初句会 石名坂房枝  
 来る人を門に出て待つ春の宵 篠島 安子  
 桐咲いて散って母の忌過ぎてあし 高堂智恵子  
 早春の湖へ艇庫の扉開け 駒形 隼男  
 春光をすくひ上げては水車 橋本 正乃  
 風薫る畑でひと息つく間にも 平田 ゑみ  
 幼児に案内されたる雛の間 折橋紀与美  
 塩田の砂に慟哭敗戦日 西谷 笛秋  
 宙を舞ひ星屑となる吉書かな 坂下 成紘  
 溪深し真昼に光る草の露 牧野 妙子  
 山路抜け出て一本の遅桜 堀口 紀子  
 吐息とは香をこぼすとき女王花 松本 松魚  
 ぶらんこも宇宙飛行士への一步 辰巳 葉流  
 咲き競ふ梅の高さに空の青 辻 文江  
 しばらくは垣根に遊び巢立鳥 水上 栄  
 豊饒として白靴の白寿翁 岸本佐紀子  
 まろやかな風下萌にゆき渡る 村本寿美枝  
 夫丹精込めし朝顔咲き初めり 宮田也寸子  
 虚子句碑に迫る勢出水跡 伊東弥太郎  
 野面積隙間に光るほたる草 橋本紀美子  
 ストックのあけぼの色を教わりぬ 西やすのり



壁に古る医訓と父のパナマ帽  
 声絶えぬ明るき茶の間シクラメン  
 青田風届く鐘楼非無の寺  
 青空へ二人の息のしゃぼん玉  
 明易や魚臭に動く港町  
 一村に社の杜や秋の蟬  
 春愁や休校続く子供達  
 コスモスの風に除幕を待ちし句碑  
 老鶯の声に静寂深む墓地  
 はや風に揺るる蔭あり庭若葉  
 仰ぎ見る高さに咲けり朴の花  
 秋冷の心地よきとて侮れず  
 師を崇む涼しき非無の心の目  
 一人住む米寿の雛を納めけり  
 灯台の小さく見えて鳥帰る  
 鬼百合の招けど自肅の句会なし  
 視野なべて雪割草の花筵  
 白子干磯の香りの朝餉かな  
 腕白は鞆を漕ぐ高さにも  
 エープリルフルで済まぬコロナの世  
 縄を解く狭庭の日差春隣  
 一刻の虹に華やぐ鳥の空  
 百千鳥西行庵に辿り着く  
 五色椿全き紅の一弁も  
 頼りなき軽さも風情夏布団  
 沈む日を映す植田の風の綾



岡村 俊子  
 水橋眞智子  
 西 登美枝  
 松本 寿憲  
 向 佐ち子  
 中村 珠栄  
 梶井より子  
 松本 慶子  
 村中 久恵  
 矢木 桂子  
 岩本 松江  
 東 澄子  
 村上 秀吾  
 河越 敏子  
 森田 康夫  
 熊野 雅子  
 長徳谷とし  
 出島 達子  
 堀口 道子  
 永井佐和子  
 広島 明臣  
 田辺 国和  
 吉田 佳代  
 松室美千代  
 西野久仁夫  
 赤島磨智子

福井

令和へと繋ぐ翁の露の杖  
 黄泉の句座賑やかならむ盆の月  
 余生とは飾らぬ暮し蕎麦の花  
 男皆女らも皆生身魂  
 力石残りさびれし村祭  
 遠き日の恋の思い出天の川  
 ふと夫を父と見紛ふ良夜かな  
 あぢさゝみや草鞋掛けある木曾の宿  
 同窓会二つ失ひ年暮る、  
 たこ焼の天地くるりと祭笛  
 北風すさぶ神の島へと打つ怒涛  
 師の逝きて杖音もなし秋の声  
 露けしや魯迅の恩師村医者で

山口やすか  
 山口 霞牛  
 多田みす枝  
 山岸世詩明  
 村上 雪  
 奥 清女  
 堀なでしこ  
 木幡 嘉子  
 岸本 幸子  
 為永香月枝  
 田野井かづを  
 中山 昭子  
 末政千代子

浅間見ゆる湖にスケート靴で立つ  
 立秋や実りを願ふこと多し  
 ふと晩夏頬をなで行く風を知る  
 狭庭畑こもり挿してトマト熟る  
 俯瞰せば桜の下に人と蟻  
 失ひしものいとしき古歴  
 春めいて同じでなくてみな光る  
 出水橋に堪ゆ母の町父の村  
 雪帽子七福神の道祖神  
 車窓より夫と二人の花見かな  
 勝ち負けを超へて白球雲の峰  
 山の日や表銀座と言ふ佳き名

大久保白村  
 宮澤 正  
 小池 保子  
 勝山 學  
 瀬在 光本  
 鈴木しどみ  
 小泉いく子  
 山口 芳輝  
 清水 順子  
 川崎 繁子  
 牧野 菊生  
 田中 延子

長野

募集 私の一句

新たななる挑戦雀隠れかな  
 水打つて夕風の立つひとところ  
 母山羊と離され子山羊牧の春  
 短夜の明くるやいなや畑仕事  
 アルプスをはるかに蕎麦の花あかり  
 軽さうに掲ぐ大杉春満月  
 豊かなる森をゆらして時鳥  
 吊り橋は五人までとや苔の花

丸山 ま美  
 縣 展子  
 清水 節子  
 佐藤 文子  
 小林 貞子  
 井出 節子  
 西本 ゆき  
 小林つくし

同封の郵便はがきに記載の上、九月末までに次へお送りください。  
 ○宛先 〒930-0241  
 富山県中新川郡立山町道源寺  
 荒木かづを 宛  
 831211



# 日本伝統俳句協会北信越支部決算及び予算

(自 令和2年4月1日～至 令和3年3月31日)

## 1. 一般会計

(単位：円)

令和2年度決算			令和3年度予算	
収入の部			収入の部	
項目	決算額	備考	予算額	備考
前年度繰越金	528,749		716,641	
利息	2		2	
運営協力金	647,000	2000円×323.5口	600,000	
合計	1,175,751		1,316,643	
支出の部			支出の部	
協力金振込手数料	28,403	ゆうちょ銀行払込	30,000	ゆうちょ銀行払込
会報発行費	157,819	会報33号発行	150,000	会報発行
事業報告会及び 研修会費	150,000	各県部会へ補助金 <sup>(注)</sup>	150,000	各県部会へ補助金
事業協力費	10,000	姨捨句会	20,000	姨捨、山中、敦賀等
会議費	-		200,000	役員会等
情報関連費	-		50,000	WEB会報費用
事務費	102,888	郵送料ほか	80,000	郵送料ほか
予備費	10,000	入会補助金2名	50,000	入会補助金
小計	459,110		730,000	
次年度繰越	716,641		586,643	
合計	1,175,751		1,316,643	

(注) 各県部会への内訳は、新潟3万円、長野3万円、富山2万円、石川5万円及び福井2万円の計15万円である。

## 2. 記念事業積立金

一般会計とは別に全国俳句大会準備金等として 1,500,208円積立

お知らせ

## 大会ご案内

●第44回北信越ホトトギス俳句大会

(当番県 富山)

期日 令和3年9月26日(日)

会場 富山国際会議場

リモート参加可

兼題句募集

締切 令和3年6月20日(日)

問い合わせ先 荒木かつを

電話 075-462-3137

E-mail araki-ka@575club.net

「虚子」に学ぶ日本伝統俳句協会  
北信越支部Web会報

[古壺新酒] <https://575web.com/>

QRコード (携帯電話でも可)

主なメニュー

各地イベント 結果

入門講座 入会案内

句碑案内 芭蕉の足跡

俳句随想「俳句つれづれ」句集紹介など

日本伝統俳句協会・北信越支部活動として、

Web会報(案)や最近の俳句づく

り・鑑賞情報を掲載しました。



# 日本伝統俳句協会

## 北信越支部への協力金

〔令和二年度〕 〔二〇二千元〕

ご芳名および口数

五十音順・敬称略

(10口) 安原 葉

(5口) 青木く美子・板垣柳子・大久保白村・

勝山 學・駒形隼男・鈴木しどみ・

瀬在光本・高堂智恵子・村中久恵・

安田畝風・安浄寺勉強会

(3口) 中村曜子・山岸世詩明

(2・5口) 赤島磨智子・今井芳子・

岩城未知・大橋美代子・岡村俊子・

北 重子・桑原たかよし・小池保子・

田野井かづを・富井千鶴子・富永麻子・

長徳谷とし・仲谷美枝子・野村玲子・

広島明臣・藤原 哲・堀口紀子・

牧野菊生・松本慶子・松本松魚・

宮沢 正・宮田也寸子・宮本博子・

矢木桂子

(2口) 荒谷みえ子・伊東弥太郎・

稲田節子・岩本松江・大久保雪子・

小川則子・笠原佐千子・片桐久恵・

川崎繁子・窪田富美子・坂井一二三・

末政千代子・高城玲子・高田俊彦・

田上眞知子・辰巳葉流・辻文江・

辻美智子・鶴見昭子・中川外代子・

中村珠栄・西澤ひろみ・西本ゆき・

平田えみ・藤井敏子・牧野妙子・

森田康夫・横町陽子・吉田佳代

(1・5口) 青木福太郎・浅井和子・

有川 寛・石名坂房枝・井出節子・

榎本清津子・大矢あき子・小川のぶ子・

奥 清女・折橋紀与美・金子慶一・

岸本佐紀子・北川まつ子・北七喜美子・

桑原幸子・坂下成紘・佐藤文子(小諸)

佐藤文子(長岡)・佐藤美春・清水順子・

鈴木恵子・西登美枝・橋詰シズエ・

藤田暁夫・松室美千代・水上 栄・

向佐ち子・村上秀吾・村上 雪・

安井里子・山口霞牛

(1口) 縣 展子・荒木かづを・荒木陽子・

飯島俊子・井上大輔・岩崎晃嗣・

岩島照子・上田千鶴子・宇波可津志・

岡山幸子・小幡道子・梶井より子・

加藤公男・金箱一世・川口俊子・

岸本幸子・北川越草・北川秀子・

熊野雅子・小泉いく子・木幡嘉子・

小林貞子・小林つくし・坂本雪峰・

佐藤恵一・佐野皐月・澤野和子・

篠島安子・清水節子・瀬古祥子・

與谷幸子・田代草猫・多田みす枝・

田中延子・田辺国和・谷口由美子・

谷原桂子・為永香月枝・内藤 孝・

永井幸子・永井佐和子・中田康子・

中山昭子・西川 忠・西澤直子・

西野久仁夫・西 裕典・橋本紀美子・

橋本正乃・畑中節子・林 智子・

東 澄子・樋口美絵子・平野孝純・

藤田百生・船上照江・堀口道子・

堀なでしこ・本田輝代・本間百果・

松下 薫・松田 勲・松平紀代子・

松本寿憲・松本洋美・松本玲子・

丸山ま美・三島由紀子・水橋眞智子・

宮澤澄明・宮下末子・宮前はやを・

宮村啓子・村中聖火・村本寿美枝・

八百恵子・八島三枝子・山口やすか・

山口芳輝・山城千鶴子・吉澤 萌・

吉田みはる・吉田洋子

### お願い

## 北信越支部への協力金

昨年も多くの方からご協力をいただき御礼申し上げます。北信越支部の活動資金は皆様の協力金という名の会費に依っています。今年度も同封の趣旨をご理解いただき、絶大なご協力をよろしくお願い申し上げます。

○協力金 一口 二千元 何口でも結構です

○期 日 9月末日

○振込は 振込用紙でお願いします

振込番号 006501613870

○加入者名 日本伝統俳句協会北信越支部

